

○憚 樋口君

生島之里人

一、若きつま、幼き兒等をおきて逝く

君を思へば心に泣かゆ

二、斯之道の、奥かを止めん望さへ

空しく去にし君を悲しき

三、くたひやすき、爾のたまへをまさくこ

君か身の上に見るそくやしき

○樋口君の逝去を惜みて狂歌一首

榛 嶺 學 人

ほさばしる才は樋口の水のごみ

氣もたくまき君ぞしのばる

(昭和三年五月三日)

樋口君を思ふ

林 貞 三

樋口君は長野蠶業試験場報告第二號に載すべき試験場全景を撮影するために、三十尺の電柱に登り、第二回目に高壓線に感電し、遂に、三十三才を一期として世を去られた。

此の樋口君の行爲に對し、無謀の事をしたものだと思ふ方も或はあるかも知れない。然し少しの不満足をも諦めない

(見)

理想主義的態度、事に當つて細心の研究を盡くし斷行するあの自信力と膽力とがなければ世の大事業は成し得るものではないと確信する。樋口君の死を惜む所以は實に此處にあるのである、無謀さか、危険さか云ふ事は、樋口君に於て全く用のない言葉であつたと思ふ。恰度吾々が遇然的のミステークを恐れずに自轉車や汽車に乗る様に。

樋口君の仕事は悉く生きて居る、云ふ迄もなく魂があるからである。人心動もすれば魂を失ひ不眞面目になり勝ちの世相に對し、樋口君の死は將に活を入れるものである、然ればこそ樋口君も男子の本望として安んじて眠られる事と思ふ。

噫 樋口 琢磨 君

尾 見 祐 八

昭和三年四月廿一日午前十一時頃であつた。長野の岸勝彌氏から突然の電話 『樋口君が怪我した』……『もうだめだ』『直ぐ試験場へ来い』……私はあまりの驚愕に何事も返事の仕様が無かつた、時計を見れば長野行次の電車に間に合ふのでその儘飛び出す、折からの祭禮の人混の中を縫ふて停車場へひた走りに走る。發車間際のプラットフォームには多くの人々が動いて居る様だつた、後部の座席に腰をおろす、電車は動き出した。あゝ夢ではないだらうか？ 樋口君が？ 樋口君が？ うそだ、きつと嘘だ、何かの間違だ。私が今行けば喜んで俺を迎へてくれるのだ。今俺に笑ひかけて居るではないか？ 『樋口君が怪我した』……『もうだめだ』……ほんごうだらうか？ 死？ 死？ そんなこゝは無い、きつと無い、あつてたまるものか？。

不安と憎愴との思を乗せて電車は走る。窓外の山森人家目に映じては消え去る。泣いてはいけぬ、泣いてはいけぬ